



宮崎大学学術情報リポジトリ

University of Miyazaki Academic Repository

M.ヴェーバー工場労働論における教育認識の構造と
特質：形成契機としての"自律化"の思想史的位相

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本教育学会 公開日: 2008-12-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河原, 国男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/1678

M. ヴェーバー工場労働論 における教育認識の構造と特質

— 形成契機としての“自律化”の思想史的位相 —

河原国男*

16-7世紀、教育慣行の結果、世俗内職業労働を「天職」として励んだという事例を究明したM. ヴェーバーの工業労働調査論を本稿では中心にとりあげ、同時代の20世紀初頭の工場労働を通じて意図的、無意図的にどう資質能力が形成されるか、という認識を、人間形成契機としての自律化を視点に跡づけた。その結果、国民を対象とする政治教育の課題認識と繋がりつつ、機械化とともに、自律化の契機も同等に探究されていた様相が明らかにできた。すなわち、工場内分業労働での「練習」を通じて、労働外の価値関係的関心にも導かれながら合理的に「考量」しつつ、また中世職人のように最終生産物を生産するように市場的関心をもって働くこと、そうした「実践」を通じて自己自身を人間形式的に配慮するという自律化の可能性が、工場機械化のただなかでも探究されていた。

1 はじめに

本稿はマックス・ヴェーバー (Max Weber, 1864-1920) の「練習」観が展開する工場労働調査論をとりあげ、そこに示された教育認識を、人間形成の“自律化”の契機を視点として把握し、その教育認識の歴史的意義を究明するものである。

ヴェーバーは論文「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(1904-5年学術誌に初出。1920年改訂出版。以下、改訂版による。「倫理」論文と略記)で、16-17世紀西欧の禁欲的プロテスタント諸派を事例にして、世俗内の職業労働が近代資本主義の形成を導いたことを論証した。その際、**「あたかも労働が自己目的であるかのように励むという志向」**が自然的所与ではなく、「長年月にわたる教育過程の産物」(1920: 46)であるとかれは考察し、その教育慣行の姿を具体的にも記述していた。そのうえで現代的状況について、論文末でこう指摘した。「ピューリタン教徒は、職業人たらんと欲した——われわれはそう欲せざるをえない」(1920: 203)。よく知られたこのことばの意味を直後の文脈から内容を捉えれば、職業労働が「機械的生産の技術

的・経済的条件」によって厳しく制約され、「歯車装置」(Triebwerk)なかに諸個人が入り込まざるをない事態を指している。この組織的な機械的生産の場では、いかなる人間形成がおこなわれ、またないうると、かれは「客観的」に実証していたのだろうか。

これもまた教育の問いに属す。この問いをより明確にするためにモムゼン(1974)の指摘にふれよう。『マックス・ヴェーバーとドイツ政治1890年—1920年』(1959)の傑出した業績によって、ヴェーバーの思想と行動を同時代政治史のなかに実証的に跡づけたかれは、「限界状況にある自由主義者」としてヴェーバーを把握している。そうしたモムゼンの所見は、教育認識を究明しようとする本稿にとって示唆的である。「産業資本主義から生まれた社会的諸条件——ことに鉄の労働規律と、一個の人格としての責任をとる態度が日常の産業労働から駆逐されるということ——のもとで、人間の尊厳はどうすれば守り通すことができるか、というヴェーバーの問いは、資本主義的産業社会におけるプロレタリアートの社会的『疎外』克服の道を示そうとするマルクスの苦しみと完全に肩を

*かわはら くにお 宮崎大学

キーワード：練習／分業／自律化／機械化／実践的／考量

並べている。しかるに産業社会の社会学的分析は、ヴェーバーを導いて、多くの点でマルクスと反対方向の結論を得させたのである」。すなわち、資本主義に対するヴェーバーの態度がその体制を「擁護」する一方で、この体制の齎す「非人間的な作用」を「告発」した、というアンビヴァレントなものであったこと、この場合に「人格の自律」(Autonomie der Persönlichkeit)が放棄できない原理として探求されていた、こうモムゼンは両面性を指摘した²⁾。

ヴェーバーが人格の「自律」を原理として重んじたことが、ニーチェにどこまで結びついているか、その系譜に関するモムゼンの理解の当否に本稿では深く立ち入る余裕はないが、当の両面性の把握そのものについては、基本的に支持する。

さらにモムゼンのことばで補足しよう。ヴェーバーは非人間性を生み出す「疎外」の「固有の源泉」をマルクスのように「所有関係」にみたのではなく、近代の産業資本主義体制がいやまさりに作りだしていく全能の官僚制的支配構造のなかにみた(1974:247)。こうした問題状況はヴェーバーのことばで、「官僚制的機械化」ともいわれよう。実践的な提言が求められる場(社会政策学会大会)で、かれはこう述べてもいた。「一人びとりの労働者はこの機械の中の小さな歯車(Rädchen)となる。そして内面的にますます同調して、自分を歯車と感じ、次のような問いかけをするだけとなる。こうした小さな歯車からより大きな歯車になれないのだろうか、と(ob er nicht von diesem kleinen Rädchen zu einem größeren werden kann)」(1909a:413)。「大きい歯車に」という期待を含んだ問いかけは、それに対する賛否の価値判断は別にして、意図的な人間形成に対する思いを指している。

非人間的ともいえるこの傾向についてのかれの所見に関する近年顕著な研究動向として、近代の運命的な“陰”の部分へのヴェーバーの危惧の念が強調される。労働現場にも浸透する官僚制化事態は、まさに禁欲的プロテスタンティズムにより「意図せざる結果」として「倫理的基礎」が与えられたとかれ自身冷徹に捉え、そのうえで「合理化が内包する破壊的な力」(山之内靖)に警告を発したとも論究される。そしてその「基礎」を形づくる「規格化」(Standardisierung)は系譜的にかのM.フーコー『監視と処罰』のいう「規律・訓練

と親和的な関係を帯びていることも、論証される³⁾。

そうした考察を支持する余地はたしかにヴェーバーの論述のなかに見出せる(1920:187)。しかし、本稿ではさきのモンゼンの指摘に添いつつ、別の方向を見出したい。「機械化」という事態が比喩であるとともに、文字通りそのものでもある工場労働に関する、ヴェーバー自身のよく知られたことばがある。「この官僚制化の強大な傾向に直面して、なんらかの意味で『個人主義的な』活動の僅かに残った自由を少しでも救い出すことは、そもそもどうすればまた可能であるか」(1918:321)。こうした可能性の問いに対し、絶望的な解答を返すよりは、労働者問題に関する中村貞治の論究⁴⁾が示していたように、わずかな余地でも期待の方向にあるかれ自身の認識の証跡を本稿では見定めていきたい。工場現場に即した形でこの点をかれがどう学問的な実証性をもって問いかけ、認識し、究明しているか、という関心を基底に工場労働論におけるヴェーバーの教育認識の展開を本稿では跡づけたい。

工業労働調査論として括られる、これまでのヴェーバー社会政策研究等でもとりあげる機会の乏しい論文⁵⁾がある。生産の施設を強調し工場労働調査論とも本稿では捉えておこう(ともに調査論と略記)。これは、社会政策学会の調査のために用意され、弟のアルフレッドが作成に協力し、1908-9年に発表された、初出「倫理」論文以降の作品である。

工場労働する諸個人は、“機械化”に適合する資質、能力が本来的に求められる。その事態は人間を形成する重要な契機となっているであろう。かれによれば(1911/13:86-87)、アメリカのTaylor-systemが、こうした事例を典型的に示す。その種の認識をこの調査論に見出すことは十分可能である。が、その確認以上につきの点を本稿では究明したい。工場労働する人間のあり方の課題として人格の“自律”は、「歯車」となる人間と対照的に、活動の「自由」をもった当の人間のどのような取組により実現すると、かれは同時代のドイツの工場に即して認識していたか、という問いである。

こうした問いを設定して、ただちに言及せねばならないのは、その“自律”の概念である。未定稿『経済と社会』(1911-13年草稿)でヴェーバー

自身が規定する用語法に即せば、団体秩序に関して、内部を自己自身によって秩序付けることをいう(1911/13:26)。しかし、人間形成の契機に関するかれの思想を把握するためには、この用語法を直接的な形で転用することは避けておきたい。むしろ、人間のあり方の問題として“自律”の概念を捉えるという観点から仮説的に本稿で採用するのは、ヴェーバー自身が合理的行為のあり方を具体的に定式化している論説(『ロッシャーとクニース』)で引用し(1903/6:63)準拠している、ヴィンデルバント(Wilhelm Windelband, 1848-1915)の所説⁶⁾である。本稿はこれに拠って概念構築して、自然必然的な因果とは別に、「意志の自由」、「選択の自由」、「行動の自由」という諸相をもって自己自身を規定すること、とその基本的意味を捉えておこう。この概念をもって、労働する者の意図的人間形成の目標、方法を本質的に特徴づけられないか、という仮説的意味を上記の問いに含ませたい。こうした仮説が工業(工場)労働論で検証されるとすれば、その場合、労働を通じての教育の認識は、どの程度の内容範囲(目標、内容、方法など)、理論的精密度、重みを有していたか。この点に留意し、工場労働における人間形成契機の指標として“機械化”と“自律化”を捉え、後者を主な視点に教育認識の内容を明らかにし、ヴェーバー社会科学の諸認識との関連で思想構造を把握し、その教育認識の歴史的意義を考察することを課題とする。

この課題に対し方法上つぎの諸点に留意しよう。第一に、同時代の労働者問題に関するヴェーバーの社会的発言にふれておく。“自律”といいうる人間のあり方が精神的な次元とともに、政治社会的局面の意味をそなえた行動の次元でも問われていることに留意したい。その事情は、フーコー「規律・訓練」論の系譜にヴェーバーを位置づけるアプローチをなほどこか限界づけるであろう。第二に、工場労働論それ自身に示された教育認識の内容の特質を、ヴェーバー自身が認識する歴史的な(古典古代、中世、近代)労働の概念との関連性において把握する。それによって教育認識がどう意味づけられるかを究明しておきたい。第三に、工場労働に関するその教育認識が同時代に示した歴史的意義を考察するため、ケルシェンシュタイナーの劳作教育論と関連づけることにしよう。

2 労働者問題をめぐる「政治教育」課題の認識

フライブルク大学教授就任講演「国民国家と経済政策」(1895年実施)のなかで、経済学教授としてヴェーバーは、東部ドイツ地区におけるドイツ人の農業労働者がポーランドとロシアの出稼ぎ労働者の流入によって退却している問題(「ポーランド問題」)をとり上げた。そして、この問題は、現下プロイセンが当面する農業政策問題であるよりも、「われわれ皆の問題」であると自覚的に規定した。すなわち、この20年来のビスマルク政治のもとで労働者層が「政治的成熟」を示していないこと、その問題はユンカー領主階級、ブルジョアジーなど、国民たるべき各階級にも該当すること、そしてこの問題は「経済的下部構造を反映」(1895:18)しているのではなく、「当該社会的経済的な生存諸条件下でどんな人間が養われるか、その人間の質」(1985:13)の問題であること、ゆえにこの解決のためには、「ある壮大な政治的教育事業(eine ungeheure politische Erziehungsarbeit)を起こすこと」が課題であるとかれは認識した。「われわれの科学の究極目標もわが国民の政治的教育という点におかれねばならない」(1895:24)とまで総括していた⁷⁾。

政治的未成熟とは、どういう人間のあり方か。労働者の場合、以後(とりわけ第一次世界大戦の終了まで)における関係する論説⁸⁾のなかのヴェーバーの所見によれば、こうである。消極的には、労働者が「家父長」的に支配され、依存的資質を形成している事態であり、積極的には、労働条件の集团的協定において労働者層が雇用主団体と対等な権利を持って「組合」という形で参加する意欲を喪失している、という事態である。いずれにしても、労働者が政治的社会的局面で「無力感」に陥っている状態で「精神的な独立を欠いている人間」(seelisch unselbständiger Menschen)(1912:266)という教育問題として、ヴェーバーは捉えていた。

こうした局面とともに、それ以上に“自律化”という人間のあり方を実践的な課題として不可避に、持続的に要請するという点で深刻なものとしてヴェーバーが認識していた局面がある。工場労働現場内部における労働者ひとりひとりの精神的位相の問題である。

3 工業労働調査論

1) 人間形成への問いかけ

「封鎖の大工業労働者の淘汰と適応(職業選択と職業運命)に関する調査」、「工業労働の精神物理学について」を本稿でも調査論として一括しておこう。それらは1908年におこなったエーリングハウゼンの織物工場の実地調査に基づく⁹⁾。

この調査論には他のかれの論述と対比して、教育に関連する語彙が実は際立って集中して使用されている。すなわち、疲労、回復、慣れ、労働の中断などの概念とともに、「練習」(Übung)とそれに関連する語句が豊富に見られる¹⁰⁾。それらは、「第二の偉大な教育者」(1911/13:686)と称される工場規律そのものとは区別されるOJTに関する人間形成の現場を指し示している。労働に従事して自己の諸資質や知識、諸技能を形成する、という事例がその現場に即して記されている。教える者と学ぶ者が明確に区別される場合¹¹⁾と比較すれば、学習のカテゴリーで把握できる教育認識をこの調査論に見出すことができる。

こうした教育認識は、この調査論中でけっして付随的な位置にとどまらない。はじめに主要な研究課題として人間形成への問いが設定されている。そこに本稿の問いを根拠づけるヴェーバーの問題意識が示されている。かれはいう。新しい、技術的に完成化された機械のいかなる採用も、一方では、一連の労働過程の排除、すなわち「ある特定の、これまで必要とされていた労働者の資質を無効化する」ことを意味する。労働能力の乏しい不適格者の「淘汰」(Auslese)に通ずる。他方では「新たに採用された機械を操作し、そのために、ある資質を開発(entwickeln)しなければならない、そのような労働者の使用を意味する」。開発するとは、雇用労働者でも、その資質のある面が「排除」され、他の面が「培われる」(gezüchtet) (1908a:86)等のことを意味する。この見解が示すように、才能ある者の「選抜」(Auslese)とともに、工場労働を通じていかに人間形成がおこなわれるか、という関心がかれの研究上の問題領域となっていた。

2) 心理学主義的アプローチ批判

—「練習」概念の成り立ち—

こうした関心の所在ではあるが、しかしこの調査論の全体内容には、意図的な人間形成としての

教育の認識としてただちには同定しがたい論調がある。すでに指摘されているように¹²⁾、この調査論(とくに「工業労働の精神物理学について」)の大部分が、クレペリン(Emil Kraepelin, 1855-1926)とその学派の実験心理学の成果、とりわけ「労働作業」(Arbeitsleistungen)に関する包括的研究を先行研究としている。「卓越した」業績(1908/09:223)ともかれは評す。クレペリンが留意し、ヴェーバーも評価するのは、疲労感といった主観的な「感情状態」(Gefühlslage)と客観的な生理学的実態に関する「精神物理学的諸前提と作用」との区別である。両者はしばしば乖離するゆえに(1908/09:170-171)、その作業能力は「心理学的には特徴づけられないもの」(psychologisch nicht Kennzeichnendes) (1908/09:171)とする所見にかれは賛同する。

しかし、こうした認識態度に基づくがゆえに、ヴェーバーは心理運動的的刺激、興奮、衝動等に関する「表象」作用を重視するクレペリンのつぎの問いそのものに対してはむしろ懐疑的であった。「そのかなりの部分について、もっぱら心理的に(psychisch)導き出される諸因子の疑いない作用は、厳格に生理学的に(physiologisch)機能する疲労や練習に関する理論といかに結びつけられるか」(1908/09:226)。観点を区別し限界づける上記の認識態度が、こうした問いかけには示されていないのではないか。ヴェーバーはそう懐疑する。

「心理学主義」(1903/6:63)のアプローチを批判するこの姿勢は、消極的には、表象という心理的次元で感情や期待、目的など、「当為」と「存在するもの」として識別されるべき複雑な諸要素を平板に一義的に捉えてしまう問題の認識に基づく。より積極的には、こうである。諸個人の「行為」を主観的に思念された意味をもち、目的・手段の関係で基礎づけられるものとして捉えること、例えば、糸から織物を作る目的でいかなる機械、燃料、労働給付等を手段とするか、という『実践的』(pragmatisch)立場に基づく(1908b:396、398)。そしてこの立場は、行為に属する当の(工場労働を通じての)練習を通じて、どう人間形成がおこなわれるか、その成り立ちに関するヴェーバーの認識の仕方を決定的に規定する。おもに二つの契機にかれは着目している。

a: 行為主体にとっては客観的な内的自然に属す精神物理学的次元の契機。

b：行為主体が目的や手段との関係等について意図する、行為論的次元の契機。

後者の関心は、この調査論の内容に即せば大別して二つの対象に分けられる。工場就職の以前¹³⁾と以後¹⁴⁾の人間形成である。労働者の人間形成を、分業の結果としてのみならず、分業化以前をも含めた教育過程の所産としてもかれは想定している。

3) 「練習」の両極的な認識構造

— 工場労働を通じての人間形成 —

この対象領域への関心は、内容的には一般的であろう。その関心が特徴的なのは、上記 a、b の関心に基づく両極性にある。すなわち、練習論として現れるかれの教育認識は、人間形成の“機械化”の契機と意図的な“自律化”の契機とを同等に対象化し、両極的に徹底した構造をもって成り立っている。けっして明示的に区別した記述構成があるわけではないその事情を、本稿ではより後者に重点をおき検証していこう。

a：工場労働における“機械化”の人間形成契機

かれによれば、工場の機械化に伴い労働はリズム化し専門化し、そして労働生産物としての製品の規格化が進む。その際これらの傾向は当の労働者の諸資質に対し「“自動化”」(Automatisierung) (1908a：97) し、「断片化」し (zugeschnitten) (1908a：95) し、「規格化」(1908a：95) する。こうした諸特徴を意図して、あるいは意図せずして人格的資質のうちに刻み込み、人間類型を形成する事態を究明すること。当時の一般的な用法で、労働者についての“性格学的”(charakterologisch) (1908a：95) 研究課題としてかれは内容的にも立ち入って記述した。こうした同時代(20世紀初頭)の工場労働と、古典期(4、5世紀) 奴隷労働との所見を対比しよう。後者でも労働は分業化している(1909b：144)。奴隷は主人に扶養されている。それゆに、その仕事場そのものはオイコス(主人により組織化された大家計)の一部を成して(1909b：21)、身分的に不自由である。これに対し工業労働者の場合には、奴隷身分として工場経営者に隷属してはいない。「自由意志による契約」関係ではある。しかし、工場労働に本質的に導入される“機械化”に心身の自然のリズムが隷従する、という事態がある。そうした自然の必然性に従う原因性をもった生の現実を厳しく冷静

に認識するということは、計算可能性を準則とする、ヴェーバーの「意志の自由」の観点からすれば、工場労働に従事する人間に対し困難な主体的条件を性格づける。その意味で、この点への問題関心は、機械労働は労働者の「すべての自由な心身の活動を奪ってしまう」¹⁵⁾と論じたマルクス『資本論』(第1巻第13章「機械装置と大工業」)の認識と接近する。と同時に、練習を通じて「従順な身体」を形成するという点で、姜尚中も論証するように、「規律・訓練」概念をもって工場労働をも分析するフーコーの関心ともたしかに連なってくるだろう。

b：工場労働における“自律化”の人間形成契機

しかしヴェーバーはマルクス、フーコーとは異なって、その工場労働、すなわち、世俗外の修道院での労働ではなく、世俗内で、しかも工場内で「管理される」労働でも、機械化に対立しうる諸要素に着目し、肯定的に人間形成する契機としての意味を模索し、具体的に問いかけている。

「労働に対する極度の不快と主観的な“疲労感”にもかかわらず、同等のみならず、それどころか(練習の結果)業績の上昇さえも達成される」(1908/09：171)。クレペリン学派の知見として紹介されているそうした認識は、精神労働と肉體労働という区分ではなく、労働そのものに精神的働きの要素を尊重するヴェーバーの姿勢に通ずる。かれはいう、「“精神的”労働の概念をあまり“窮屈に”捉えないなら、工業上の労働諸作業の幅広い領域がこの概念で対応する。…たとえば、機械のための素材を加工している場合、シリンダー穴あけ作業に従事している労働者の活動は、“本質的に”——…——手術中の外科医の活動と同じ種類のものであること。…また、機織り機の取り扱いをまかされている女性労働者の資質は、…本質的には、彼女がきわめて多数の機織り機を同時に操作するという“沈着さ”や“洞察力”を持ち合わせているかに係っている」(1908a：101-102)。こうした高次の精神的働きは、かれが隔字体でしばしば強調する、計算可能性を準則とする「考量」概念に相当する¹⁶⁾。この労働調査論でもそのことば使用される。すなわち、「労働者が自己の作業を程度や種類に沿って“具体的な”(すなわち、“収益上の”)目的へと計画的に調整したり、引き上げたり、引き下げたりすること、あるいは多くの作業が並行しておこなわれる場合(…)に、その組

み合わせの種類を改めること、こうした事実になれわれは再三直面するだろう。このような計画的な調整作業が求める“最大値”を、われわれは“実践的”な判断をもって追求できる」(1908/9: 246)。こうした精神の働きを「合理的考量」(*rationale Erwägungen*)としてかれは同じ箇所では把握する。

「“精神的”労働」の概念をこのような要素を含む高次の水準にまで拡張することは、ヴェーバーの認識にしたがえば、労働に工作の要素とその段階性を認めることを意味する。かれはこう明言する。「“不熟練”(ungelernt)労働の最下位の段階から“技芸”(Kunst)に近い“熟練”の体得の段階まで、労働能力と労働者範疇に関するほとんど間断のない階段の可能性がある」(1908a: 92)。

技芸に近い“精神的”労働の概念の契機について二つの点が重要である。一つはその先例。西欧中世のツンフト(親方と徒弟からなる手工業者組合)と結びつけて、かれはいう。“熟練”労働者とは「ある意味では“多面的な”習得過程を、古いツンフト的な手工業見習いか、あるいはすくなくともこれと類似の仕方、すなわち、手工業であれ、特別の養成所であれ、工場自体であれ、類似の仕方で終了した者」として理解される(1908a: 93)。もう一つは、リッケルト(Heinrich Rickert, 1863-1936)に依拠する概念である「価値関係」的な関心。「幾多の工業では、その技術的な進展は、神経上の諸機能、すなわち、注意力緊張や類似する頭脳活動(*Gehirnleistungen*)を、ますます要求する方向に動いている。したがって、この方向は通常の意味で“精神的に”労働する諸層の作業(*Leistungen*)から区別される。この方向の作業ではその内容が単調であり、われわれが『精神的』労働の対象とよく結びつける“価値関係”(Wertbeziehungen)が本質的に欠落している」(1908a: 103)。

以上の意味での「“精神的”労働」は、当の工場には見出しがたい。けれどもかれは、その実現の可能性を労働者仲間のあり方に即し模索している。

「近代的な仕事場は、その職階制的ヒエラルヒー、規律、そして機械への労働者の緊縛、機械の集積をともなったが、同時にしかし(たとえば、昔の紡ぎ工と比較して)労働者を孤立化させ、きわめて簡単に労働者が操作できる巨大な計算装置をもとめない、——概念的には——生産の組織が

“資本主義的”か、“社会主義的”か、という区別には左右されないものである」(1908a: 149)。こう記して、「孤立化」の箇所にかれは注解している。「労働に際してどの程度会話がおこないうるか、あるいは(またなぜ)おこないえないかという問題、労働者仲間の間で、どんな資格(職業的な、あるいはその他)が優位を占めるか、労働者内部での倫理的価値判断の方向にかかわる——すべてのこの種の、または類似する諸問題は、作業場“共同体”(…)によって、ならびに労働に対する純粋に金銭上の関係の優先(その度合いに応じて区別されねばならない)によって、どう条件づけられるか、という点で研究されねばならない」(1908a: 149)。

こうした価値の選択や行動の自由にかかわる問いの根底には、明示的ではないが、労働する人間の主体的態度に対するヴェーバーの期待がある。

客観的な労働適性と客観的な職業的生涯という視点とともに「労働行為に対するかれらの主体的態度」(*subjective Attitude*)も同程度に問題となると捉えて、かれはこう指摘する。「いかなる労働の場がかれらにとって比較的望ましいものとみなされるか、そしてそれはなぜか。この場合——これが問題なのだが——収入への当然の関心とともに、それとは別個の動機が決定的に働くかどうか、また、それがあるとすればなにか。労働者の地域的、民族的、社会的、文化的出自によって、異なった動機が働くのかどうか。…さらに、労働者はいかなる主観的な結果を、種々の労働活動から物理的、心理的に感じるか、あるいは感じていると信じているか、…さらになぜかれらはこの職業をみずから選び、他の職業を選ばなかったのか、あるいはその両親によってなぜあてがわれたのか。…」(1908a: 141-142)。これらの問いには、工場での人間形成が、所与の職場にただ適応(機械化)する形でおこなわれるのではなく、その契機も認めつつも、主体的態度を仲立ちとした自由な行動選択をともなって、いかに“自律的”になされるか、という「実践」に対する関心が示されている。

4 「練習」概念の思想構造

練習によって、諸資質(意欲、注意力、迅速性、志向など)や機械操作能力、その熟練や効率などをめざした、以上の工場労働論は、自然的経過(疲労度、回復度など練習曲線に顕著に示される)に

即して把握される心理学的次元に属するものではない。意図的な人間形成の主体的努力を本質的特性とする行為として教育的に意義づけられる。しかも「機械化」の形成契機と対比すれば、「自律化」の形成契機として特徴づけられる。こうした練習の概念は、思想として捉えるならば、以下のような構造的な特性をもっている。

1) 「効用サービス」論との関連

— 主観的条件と客観的機能への関心 —

市場に即した効用サービス (Leistung) の概念 (1911/13 : 31) について、ヴェーバーは、客観的な機能 (働き) と心的な欲求充足とを明確に識別していた¹⁷⁾。同様に、財の生産に関わる労働組織における練習についても、主観的 (主体的条件) の契機とともに、熟練、非熟練等の働きの度合いという客観的機能の契機とに注意むけていた。そして、市場と労働組織、いずれの場合の Leistung にも、そこから価値が流出すると把握されてはいない。財の効用サービス面での限界効用説に基づく主観的価値も、財の生産の局面で投下した労働時間に関する労働価値も、みずからの概念としては価値という用語を説明していない。一般の用法として貨幣にかかわる例で価値の語を使用する場合があるが、基本的には経済行為 (交換・生産) をゲゼルシャフト形成の一形態として捉える「社会的」 (1911/13 : 63) な関心で貫かれている¹⁸⁾。こうした事情は、労働行為に関するヴェーバーの教育認識を以下のように特徴づける。

2) プロテスタントの禁欲的職業労働との関連

— 「労働外的な関心」にかかわる主体的条件 —

「機械化」という主体的条件の困難にもかかわらず、あるいはまさにこのゆえに、労働に従事している人間の「労働外的関心」のあり方、とりわけ心の習慣として形作っているその者の世界観のあり方にかれは問題関心をむけていた。その場合、宗派を問わず、現在のキリスト教徒の生活態度がかつての「禁欲的プロテスタント」のように、工場労働でも精勤という形となって現れる、という事例をヴェーバーは認識していた。経営側にとってそうした世界観は「馴致手段」であるとも指摘していた (1908/09 : 362)。が、宗教的主体のこの種の事例とともに、工場労働という制約条件下でなしうる、かならずしも宗教的ではない (「神が欲

する」かどうかは問わない)、労働外的関心のあり方をも同時に問うヴェーバーの認識関心を見落としてはならない。その労働外的関心は「価値合理的な労働意欲」 (1911/13 : 87) と結びつくであろう。ただし、非宗教的で、特定の文化価値理念への志向に関する事実確定は、この工場労働論の範囲ではうかがい知れない。そうした限界はあるが、労働意欲にかかわる精神的な働きいかんが問われている。身体労働に際しどう精神の契機が主導的に働くかが、重視されている。

3) 中世ツンフト論との関連

— 実践的に考量すること —

工場では、こうした主体的条件にかかわる困難と可能性を含みながら、労働作業に従事する。その結果的な達成いかんに熟練、非熟練の差が生じてくる。熟練度が高まれば技芸に近くなるとかれは記していた。このようなかれの見解は重要である。目的と手段について「考量」する、という仕方ではいかん「実践的」な仕事の要素が諸個人の工場労働で実現できるか、という関心である。かれの基本概念的に言えば「目的合理的な行為」に近い。経済的行為に即しては、それはこう説明される。ある経済行為が、「形式的に“合理的”」と呼ぶるのは、「事前の配慮」 (Vorsorge) が量的に、つまり「計算可能な」な熟慮という形で表示され得、かつそのように表示される度合いが高い」場合である (1911/13 : 45)。その種の行為は、貨幣を基にした資本計算が典型的である。しかし労働が「計算可能な達成の最適状態」 (rechnungsmäßige Leistungsoptima) にいたる、という意味で形式的合理性を発揮する場合がある (1911/13 : 86)。西欧中世のツンフトの職人仕事がそれであると、かれは指摘する (1911/13 : 65)。その場合には、「個々の労働者が労働対象をできるだけ長く手中に保持するよう」にし、「最終生産物別に分化するよう (すなわち、ある労働者はズボン、他のものは上衣を生産せねばならぬというように) ツンフトは強制した」 (1923 : 130)。縦に労働を分割するこの分業の行為は、孤立化した「専門化」した労働 (1911/13 : 66) よりも労働意欲を高める。「個々の労働の達成結果 (der individuelle Leistungserfolg) が労働者に確実に見てとれるからである」 (1911/13 : 87)。それは、ヴェーバーの概念規定にしたがえば、「労働の専門化」と区別されるべき

Leistungsspezifizierung (1911/13: 65) — 労働給付の「明細化」(富永健一訳) — である。マルクス分業論(『資本論』第1巻第12章分業と工場手工業)では、社会内の分業と、工場内の分業(生産過程において段階的生産物を生産する特殊な部分労働)などが顕著に区別されていた。この分業論では、ヴェーバーが工場内労働を含めて特筆するその概念は見出せない。この種の分業によって、中世の手工業者は「自己の創作物」に“喜び”(Freude)を感じることができたと、ヴェーバーは指摘していた(1920: 200)。たしかにこの分業は近代工場では指向してはいない。けれどもその場合でも、「明細化」したこの分業の要素が「入り込んでいる」。こう注記(ββ)していた。これも範疇論のなかの客観的記述に属すが、価値関係的な意味を含んだ認識の証跡として見逃すことはできない(1911/13: 65-66)。

労働者自身の“自律的”契機を含んだ人間形成に関するヴェーバーの認識は、以上のような思想的構造をもっていた。とりわけ二つのかれの関心に注意したい。第一に、労働における精神的働きについて。すなわち、工場組織のただなかであっても、その現実のなかの「僅かに残った自由」の枠内で、技艺に近い熟練に達して目的と手段を合理的に“考量”する精神の働きが、「活動の自由」が制約されるここでも望ましい人間のあり方として問いかけていた(1908/09: 246)。第二に、こうした労働行為そのものに対する態度について。その労働適性や傾倒の積極性いかにヴェーバーは「主体的」(subjektiv)という言葉で強調符とともに特徴づけ、問いかけていた。この二つの関心は、調査論全体ではわずかな記述を占めるにすぎない。しかも政策提言ではない。けれども、目的・手段という関係づけをもった行為論の次元で捉えれば、この思想的意味は重要である。一種の“自己自身への配慮”の可能性を工場労働の現場に即した形で問いかけている。その可能性は、資本主義形成期の禁欲的プロテスタントの場合でいえば、「行為を冷静に考量させることへの教育」(Erziehung zur ruhigen Erwägung des Handelns)に繋がる(1920: 158)。

そう理解できるなら、ただちにふれる必要があるのは、マルクスの「疎外された労働」の概念である。その概念の一つとして、労働の生産物に対する労働者の関係ではなく、労働内部における生

産行為に対する労働者の関係として、労働が労働者自身に「反逆し、彼から独立し彼に属していない活動」¹⁹⁾となっているとかれは指摘した。そして、このような事態を「自己疎外」と呼んだ。ヴェーバーの工場論のなかにわれわれが見出す問題意識も、モムゼンが指摘するように、マルクスのこの批判意識に接近していた。けれども、個々の労働者自身にかかわる自己疎外といえる問題状況の克服を、たしかにかれは私的な「所有関係」の除去に求めなかった。分業そのものに疎外の問題性をヴェーバーは認めているわけではない。マルクスによれば、一面的な特殊機能にしか役立たない労働力を発展させる、そのような根本的問題性であった。疎外されたこの人間のあり方に対し、ヴェーバーが根本的に問いかけたことは、工場内で分業化した当の労働課題に対しいかに練習を通じて熟練を目指し²⁰⁾、自己自身を人間形成的に配慮できるか、という点であった。

こうした自己教育的性格をもった課題は何を含意していたか。主体として配慮し、対象として配慮される自己とは、避難所を求めて世界(世俗)から退却できる、閉じた、なにかしらの“内面性”を基調とする自己ではない。世界内(国内)にあるといえる。世界を厳密な意味で疎外してはいない²¹⁾。配慮されるべき自己は、外的世界の現実と接続する。「官僚制的機械化」が普遍的に進行する組織の特徴を、自身もまた「歯車装置のなかに組み込まれている」。それならば、こうした現実認識をふまえ、どう世界を改善すべきかという実践的関心をかれはさらに示したかどうか。調査論の範囲に限るなら、「鉄の檻」(1920: 203)とも、未来における「あの隷従の檻」(das Gehäuse jener Hörigkeit) (1918: 320)とも隠喩表現される「非人間性」を生み出す事情(1920: 201)を労働者自身もまた明確に認識すべきものとして、かれは説いてはいない。けれども、別の機会では違う。すでにふれた教育課題認識とともに、「仲間意識と — 労働者組織の強化をめざす秩序づけられた闘いを土台として育つ — 階級的名誉感(Klassenehrgefühl)」をそれ自体一つの「文化価値」と見なすと、かれは社会政策的立場から指摘していた(1912: 266)。そうした自由な行動にかかわる発言は、労働者の社会的あり方を経済的利害関心に基づく「階級」のみならず、社会的名誉に関係づける「身分」の要素で規定するものである²²⁾。調査論の教育

認識は、こうした実践的な発言を実証性豊かに根拠づけている。

5 歴史的意義

—「悲劇的な隔たり」の現場からの問いかけ—
 “自律化”の形成契機を含んだヴェーバーの以上の教育認識がどのような歴史的意義を示していたか、類似する教育認識と対比し検討しよう。

「倫理」論文冒頭の問題提起箇所ではヴェーバーは、カトリックの子弟よりプロテスタントの子弟の方が実業系学校の修了者の比率が高いという同時代の事実注意到を喚起していた。ちょうどその頃ケルシェンシュタイナー (Georg Kerschensteiner, 1854-1932) がミュンヘン市視学官 (1895-1919) として実業補習学校の改革にあたっていた。その教育論は、対象的事物に没我的に打ち込む態度 (Sachlichkeit) が示す人間形成的意義を主張するものであり、とりわけ「労作」(Arbeit) を通じてその態度を実現することを評価していたこと、その場合知的熟慮の契機を重んじていたこと、これらの点でヴェーバー工場労働論の教育認識と対比しうる類縁的關係を示していた。

そうした関係の一方、明らかな違いがあった。

ケルシェンシュタイナーの労作概念は、実業系補習学校の生徒に対する、一般的人間陶冶と公民教育との結びつきを有した職業陶冶²³⁾の原理として把握され、その「教育的意味」が第一義的に認識されていた。この場合、各職業ないし職業グループに応じて組織される学校作業場を中心として、生徒自身が対象に打ち込む態度をもって当の仕事「完成」²⁴⁾させることが明確に尊重されていた。

こうした教育的意図に導かれた方向に対して、ヴェーバーが着目していた練習の場合には、労働を通じての「収益性」向上という経済行為が組織上第一義に要請されている。のみならず、工場機械と向かい合う場を必然とする練習では、「目的合理的行為」の実現を難しくする二重の制約要素を現実的所与の条件として引き受けざるをえない。第一に、労働する諸個人にとって機械のリズムに意図して合わせる事が所与の必然の条件としておかれること。第二に、その機械化のリズムに身体的精神物理的器官も呼応するという事も所与の自然の条件となること。命ぜられることなく「行為の画一性」(1911/13: 686) が条件づけられる、

こうした人間の条件が諸個人の現実的所与を二重に制約する。雇用されているかぎり、この事態を拒絶することはできない。「倦怠」という消極的な態度選択の余地がないわけではない。しかし、原則的にはその制約条件を受け入れなければならない。そのゆえに“機械化”という適合化作用が結果的に人間形成の主要な契機の一つとして働く。

そのような前提条件のうえで、労働する諸個人の「意志の自由」の働きが期待される。その場合、調査論の客観的記述のなかの価値関係的認識をたどるならば、とりわけ二つの問いかけが顕著に見出される。

第一に、その働きによっていかにして「経済外的」諸目的—「神の栄光を増すため」といった聖なる目的や、なにかしら「精神的文化価値」(1920: 204)に関連せしめられる非宗教的目的など—が労働に際し追求されているか。

第二に、工場内分業の労働の「専門化」とは区別される「明細化」を通じ、いかに「最終生産物」を見て取れる分業の要素にふれる行為が実現できるか。この問いは、ケルシェンシュタイナーが「労作」を通じてめざすものとして設定する、「完成」という目標の方向に位置づけられよう。社会的に有用な働き(効用サービス)を与えるその行為により他から賞賛され、なにほどこかの名誉を得ると思念できることにも繋がる²⁵⁾。

以上の二つの問いかけを通じて、価値合理的であり、目的合理的ともいえる要素を含んだ「実践的」な主体性をもった労働行為—いずれも工場内でありながら、工場内で官僚制的に「管理される」関係を超えた行為—の可能性を工場労働論という学問的な認識でも、かれは模索していた。

調査報告書のなかでその問いは、“機械化”と“自律化”という明確な対立関係の概念図式で呈示されるわけではない。その問いを含んだ“自律化”の教育認識も理論的整備の点で十分ではない。関連して、内容も断片的でさえある。

けれども、その記述のなかに通底するかれの問いかけは、同等な重みをもった両極性を含み、必然的に緊張感をともないながら、最高度に重い。各人は、それに示された価値への関係づけという認識論的態度に導かれた関心によって、経済外のいかなる目的のために働くか、という労働行為の“意味”(Sinn)を付与しうる(1911/13: 34)。人間形成契機としての人格の“自律化”は、目標的

性格を備えつつ、こうした意義を獲得する。そしてこの「理想主義」的ともいえる性格は、ドイツ国民の「政治教育」の一翼を意味する²⁶⁾。であれば、「自律的」人間たることは方法的性格をも帯びる。

経済外的指向の意味をも含んだ「実践的」可能性を含んだ問いかけは、「歯車」たろうとする諸個人にむけられている。山崎高哉が指摘するように、ケルシェンシュタイナーが「自らの職業概念と現実の職業状況との間に『悲劇的な隔たり』が存在することに既に気付いていた」²⁷⁾とすれば、人間形成契機としての「自律化」にかかわるヴェーバーの根本的な問いは、その隔たりを極度に際立たせる労働現場内部という限界状況からも、人間のあり方の条件をめぐり提起されていたことになる。

教育領域に属したこの学問的問いかけは、たしかに歯車のこととともに思想性を帯びて、同時代に対する「悲惨」の認識を浮かび上がらせる。そのかぎりではフーコーの系譜に位置づけることも理由のないことではない。けれども、そうした悲惨にもかかわらず、否、悲惨であるがゆえにこそ、「天職」を實踐しうる可能性に対するヴェーバーの期待の証をわれわれは注視したい。その場合でも、労働者層の「政治的成熟」に対するかれの教育的期待は、断念されているわけではない。そうした事情はフーコーとの断絶を明るみにする。

その政治的成熟という課題に緊密に連動して、きわめて重要な問いを、大戦終末期からヴェーバーはみずからの課題として積極的に引き受けることになる（「新秩序ドイツの議会と政府」1917、など）。政治的指導者をどう「選抜」するか、という問いである。国民国家の理念にかかわる、この普遍的で重たいテーマに関するヴェーバーの思想は、どう教育史上に立ち現れてくるか、という点をも含めて後の検討課題に属す。本稿ではむしろ以上のヴェーバーの所見が、後のハーバーマス等による根底的な批判的位置づけ²⁸⁾にもかかわらず、現代的状況に示唆することに最後にふれておこう。

市場経済が拡大する現代、労働環境も厳しく、雇用機会配分の不平等、所得格差の拡大などの問題を生み出すとともに、労働それ自体も淘汰しうる商品として、細分化、断片化している。それがわれわれの当面する社会的現実であれば、ヴェーバーの問いは現在もなおも用済みではない。未来

の「隷従の檻」とは、現在の「隷従の檻」であろう。この困難な状況を直視し、「従順な身体」(フーコー)たるという拘束もみずからの自由な選択の結果として受忍しつつ、必要な知識・技能等を育てていくこと、そうした自己自身に対して「自律的」に配慮する労働者たりうるかどうか。

実践的課題ともなりえるこの問いは、ヴェーバーの意識に即せば、とりわけ教員に対して際立った形で提起できるであろう。「教師の仕事に対する使命感や誇り」(2005年中教審義務教育答申)という天職意識は現在もなおも期待される。たしかにヴェーバーのいう「天職」概念は、世俗内の営利的な職業一般であって、特定の職種に限定したものではない。教師の仕事に「使命感や誇り」が強調される場合、非営利的な職種・仕事の固有性から導かれる部分を含んでいる。その固有性の内実は種々あるとしても、事実として、天職の自覚が求められている。と同時に、さながら工場労働者のように教員たちは、学校組織の現場において業務化した教育労働を通じて、なにほどこ意図して、みずからの人格的資質を「歯車」として「機械化」している。その必然の結果として諸資質は、自動化・断片化・規格化の諸傾向にさらされている。

もしも事実がその通りであるとして、ヴェーバーの「自律」の立場にしたがい、上記の問いに応答するならば、どう示唆されるだろうか。教員同士が教育労働を通じて、所与の現実組織を超えた理念的な政治社会を構成するという主体性の自覚をもつこと、その前提をもって、教育労働を通じてどう児童、生徒らの学習成果を機能として生み出すか、という市場(教室)での効用サービス(主観的欲望充足と区別される、労働給付)を求めて可能な限りひとりひとりに即し「実践的」に配慮すること、教育実践と呼ぶべきそうした実質的な働きこそ、「歯車」として断片化する部分労働(業務)を制度上避け難い客観事態として受けとめながらも、「自律化」する人間形成契機となりうるであろう。

注

- 1) Max Weber (1895), *Der Nationalstaat und die Volkswirtschaftspolitik*, in: *Gesammelte politische Schriften*, 2. Auf., Tübingen: J. C. B. Mohr, 1958 (「国民国家と経済

政策」中村貞治訳、『政治論集 I』中村他訳、みすず書房、1982).

____ (1903/6), Roscher und Knies und die logischen Probleme der historische Nationalökonomie, in: Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre (WL), 6. Aufl. Tübingen: J. C. B. Mohr, 1985 (『ロッシャーとクニース』松井秀親訳、未来社、1988).

____ (1908a), Erhebung über Auslese und Anpassung (Berufswahl und Berufsschicksal) der Arbeiterschaft der geschlossenen Großindustrie, in: Max Weber Gesamtausgabe (MWS), Band I/11, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1995 (「封鎖的大工業労働者の淘汰と適応(職業選択と職業運命)に関する調査」『工業労働調査論』鼓肇雄訳、日本労働協会、1975).

____ (1908b), Die Grenznutzlehre und das »psychophysische Grundgesetz«, in: WL (「限界効用説と『精神物理学的基础法則』」鬼頭仁三郎訳、東京商科大学商学研究編輯所『商学研究』第5巻第1号、1925).

____ (1908/9), Zur Psychophysik der industriellen Arbeit, in: MWS, Band I/11 (「工業労働の精神物理学について」前掲『工業労働調査論』).

____ (1909a), Über »die wirtschaftlichen Unternehmungen der Gemeinden«, in: Gesammelte Aufsätze Soziologie und Sozialpolitik, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1924 (「市町村の経済事業によせて」中村貞治訳、前掲『政治論集 I』).

____ (1909b), Agrarverhältnisse im Altertum, in: Gesammelte Aufsätze zur Sozial-und Wirtschaftsgeschichte, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1924 (『古代社会経済史』渡辺金一・弓削達訳、東洋経済新報社、1959).

____ (1911/13), Wirtschaft und Gesellschaft (WuG), 1. Halbband, 4. Aufl. Tübingen: J. C. B. Mohr, 1956 (「経済的行為の社会学的基礎範疇」富永健一訳『世界の名著 61 ヴェーバー』中央公論社、1979).

____ (1912), Ein Rundschreiben Max Webers zur Sozialpolitik, in: Soziale Welt. Zeitschrift für Wissenschaft und Praxis des soziale

Lebens, 18. Jahrgang, 1967 (「社会政策における進歩によせて」中村貞治訳、前掲『政治論集 I』).

____ (1918), Parlament und Regierung im neugeordneten Deutschland, in: Gesammelte politische Schriften, 2. Aufl. 1958 (「新秩序ドイツの議会と政府」中村貞治・山田高生訳『政治論集 2』みすず書房、1982).

____ (1920), Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, in: Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, I, 5. Aufl., Tübingen: J. C. B. Mohr, 1963 (『プロテスタントイズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波文庫、1989).

____ (1923), Wirtschaftsgeschichte. Abriß der universalen Sozial-und Wirtschaftsgeschichte, 3. Aufl. München u. Leipzig: Verlag v. Dunker & Humblot, 1958 (『一般社会経済史要論』黒正蔵・青山秀夫訳、上巻、岩波書店、1955).

本稿で引用した原文(独文)がイタリックスあるいは隔字体は訳語では傍点を付して引用した。

2) Wolfgang Mommsen, Kapitalismus und Sozialismus Die Auseinandersetzung mit Karl Marx, in: Max Weber. Gesellschaft, Politik und Geschichte, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1974, S. 145 (『マックス・ヴェーバー 社会・政治・歴史』中村貞治・米沢和彦・嘉目克彦訳、未来社、p.232).

3) 山之内靖『マックス・ヴェーバー入門』岩波新書、1997、とくに第2章。姜尚中「規律と支配する知」『思想』No.767、岩波書店、1988、モムゼン他編『マックス・ヴェーバーと同時代群像』鈴木広、米沢和彦、嘉目克彦監訳、ミネルヴァ書房、1994、所収のエベルハルト・デムの論文、なども山之内が指摘する方向に先行的に位置づけられる。

4) 「ドイツ資本主義の徹底的な市民化」という観点に立つ。中村貞治『マックス・ヴェーバー研究』未来社、1972、第3章第3節、とくに p.316 以下。

5) 鼓肇雄『マックス・ヴェーバーと労働問題』御茶の水書房、1971、は本稿が対象とする工業労働調査論の内容を労働経済学の視点から

分析する。

- 6) Wilhelm Windelband, *Über Willensfreiheit*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 4. Aufl., 1923, S. 69, 165. かれは同書で、「精神物理学の機械作用」との関連で、行動の自由、選択の自由、意志の自由を論じている。このヴィンデルバンドを含め新カント主義との近縁関係でヴェーバーを捉えることは、一つの方法立場として定着している。本稿もそれに拠る。その立場と関連して、調査論を解説するシュルプターの所見にふれておこう。かれによれば、ヴェーバーの関心は、カントの認識態度（経験判断として自然科学の認識をも基礎づける）を生理学見地から評価するランゲ（Friedrich Albert Lange, 1828-1875）の刺激的な試みに「接近」している。そうした調査論のヴェーバーの立場をも「生理学的新カント主義」とシュルプターは特徴づける（Wolfgang Schluchter, *Einleitung*, in: MWS, Band I/11, S. 57）。この特徴づけは本稿が論証しようとする基本的方向に添っている。ヴェーバーは、この調査論でも、存在する領域（「精神物理学」の見地から把握される感覚器官の生理学的機能）と当為の領域を認識対象として区別する姿勢を放棄してはいない。その点で、カントと一種の Materialismus（自然科学的唯物論）を両立的に把握するランゲの関心（『唯物論の歴史』）に近い。ただ、シュルプターが上記箇所できくに引照するランゲの著書該当部分と対比した場合、ヴェーバーの立場は存在・当為を峻別する以上に、両極の緊張に耐えようとする姿勢が際立っているであろう。その姿勢が人間のあり方の課題としてかりに明確に提出されていなくとも、かれ自身が実践している姿勢は、そうであるにちがいない。その点に本稿は留意したい。こうしたヴェーバーの姿勢は、現実（存在）における価値的な「位階」を尊ぶニーチェから区別できよう。前者が騎士的英雄倫理を尊び、後者が高貴性の品位感情を重んじた点でたしかに類似するにしても、その違いは両者の根本的前提にかかわる。
- 7) 政治的主題を扱った若き日の就任講演から以後の政治的論著でも、ヴェーバーは「国民教育者」としての役割をはたそうとしたという

スカップの見解と論証を、本稿は基本的に支持する。Lawrence A. Scaff, *Max Weber's Politics and Political Education*, in: *American Political Science*, Vol. 67, 1973, p.131. 同様の見解は、ヴィルヘルム・ヘニス「人間の科学」『マックス・ヴェーバーとその同時代群像』前掲書、pp.38-39、にも示される。

- 8) 「私的大経営における労働関係」（1905）、「カルテルと国家の関係によせて」（1905）、「市町村の経済事業によせて」（1909）、そして「社会政策における進歩によせて」と邦訳されている「社会政策回状」（1912）、など。
- 9) 社会政策学会の大規模な組織的調査の一環として委嘱をうけておこなわれた。この成立事情は、鼓、前掲書、pp.93-100 に詳しい。
- 10) 「“世界観”の教育」、「敬虔派の教育が労働能率に与える」、「半熟練工を熟練に仕上げる」、等。
- 11) 大学教育についてかれは、「講義室」で教える立場の「教師」と「出席」が強いられて学ぶ立場の「学生」とを区別していた。いわゆる「価値自由」論文（1917/18）を参照。
- 12) 鼓、前掲書、pp.159-164、参照。
- 13) 「個人の最大の可塑性」を示す「少年期に経験した」ことは、「“予行練習”（Vorübung）という広義の概念で包含できるだろう」と記し、学校の影響や「宗教的信条によって“習得される”（eingeübt）生活様式を通じての影響」等について、かれは問う（1908/9：193）。
- 14) 「半熟練工を熟練に仕上げるため」には、どれだけの作業量や期間を要するか。その際「ある労働者がみずからの操作をいちいち職長の指示（Anweisungen eines Meister）にしたがい新しい機械について習得（erlernen）しなければならないのか、…」（1908：94）とヴェーバーは問う。
- 15) マルクス『資本論（二）』向坂逸郎訳、岩波文庫、1969、p.407。
- 16) Max Weber (1903/6), in: WL, S. 132. など。
- 17) この識別態度は文献で注記（1911/19：34）しているように、オーストリア学派のバーム＝バヴェルク（1851-1914）に依拠している。内容的な該当箇所は、Böhm-Bawerk, *Rechte und Verhältnisse vom Standpunkte der Volkswirtschaftlichen Güterlehre*, Inns-

- bruck, 1881, S.61-63. バヴェルクに倣いかれ
 というのは、「効用サービスの意味の『財』とは
 馬とか、棒鋼そのものではなく、馬の牽引力、
 あるいは運搬力等といった、「望ましいもの
 として評価され、そう信じられる使用可能性」
 である (WuG, S.34)。
- 18) 富永健一「マックス・ヴェーバーと経済社会
 学」『思想』No. 815、岩波書店、1992. 5。
- 19) マルクス『経済学・哲学草稿』城塚登・田中
 吉六訳、岩波文庫、p.92。
- 20) この可能性に対するヴェーバーの認識は、「労
 働もたえざる反復を通じてなんらかの熟練を
 もたらす」という—マルクスとは異なった—
 アーレントの見解に近似する。ハンナ・アー
 レント『カール・マルクスと西欧政治思想の
 伝統』佐藤和夫編訳、大月書店、2002、p.
 256、参照。
- 21) アーレントによれば、資本主義の起源につい
 てのヴェーバーの偉大な発見は、「自我につい
 ての恐れと配慮であるということ」を彼が証明
 した」ことである。この指摘は、本稿を通じ
 て教育思想の側面からも立証できる。けれど
 もこの箇所続けて、「マルクスの考えたよう
 な自己疎外ではなく、世界疎外こそ、近代の
 品質証明なのである」という部分は、若干の
 留保を必要としよう。Hannah Arendt, *The
 Human Condition*, Chicago & London: The
 Uni. of Chicago Press, 1958, p.254 (『人間の
 条件』志水速雄訳、筑摩書房、1994、p.411、
 参照)。
- 22) 鼓、前掲書、p.221。
- 23) 山崎高哉『ケルシェンシュタイナー教育学
 の特質と意義』玉川大学出版部、1993、p.333
 以下参照。なお、同時代(1900-1919)ミュン
 ヘン市の補習学校の種類、開設時生徒数も、
 同書、p.325、参照。
- 24) 山崎、同上書、p.345。
- 25) 今村仁司が『近代の労働観』岩波書店、1998、
 第5章、でいう承認欲望の概念に近い。
- 26) 中村、前掲書、pp.316-336、参照。
- 27) 山崎、前掲書、p.360。
- 28) Jürgen Habermas, *Theorie des kommuni-
 kativen Handelns*, Band 1, 2, Frankfurt am
 Main: Suhrkamp, 1981 (ユルゲン・ハーバー
 マス『コミュニケーション的行為の理論』岩
 倉正博他訳、未来社、(上)1985、(中)1986、
 (下)1987)。工業労働論でもヴェーバーが重ん
 ずる目的論的合理性をめざす行為の主体が本
 質的に「モノローグ的行為」者であって、「コ
 ミュニケーション的行為」と対比すれば、後
 者のような、「了解」による合理的な調整に導
 かれる相互行為の主体ではないことをハー
 バーマスは指摘する。この相互行為論(Bd. 1,
 S.456ff. 中、p.97 以下)に対比して、ヴェー
 バーの立場が「行為者と存在せる事態の世界
 との関係を前提」(Bd. 1, S.129. 上、p.134)
 にしても、その実践的意義が失われることは
 ないと、筆者は考える。

M. Weber's Educational Thought: Structure and Characteristics in his Study of Labor in a Factory

KAWAHARA, Kunio (*University of Miyazaki*)

In *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism* (first ed. 1904/5, second ed. 1920) Max Weber pointed out that the Puritan idea and conduct of the 'Calling' in the 16th and 17th centuries were not given as qualities but the product of lifelong education. At the same time, he suggested, 'The Puritan wanted to work in a calling; we are forced to do so.' This means that the technical and economic conditions of machine products determine the lives of all individuals. Keeping such a critical consciousness of this issue, Weber wrote texts in the field of industrial sociology, and argued about political and economic policies.

In previous studies, different aspects of Weber's evaluation of contemporary industrial work have been discussed. On the one hand, there is his pessimism towards a work ethic rooted in religion which has already faded with time. In his political and economic writings this was represented by the most famous "iron cage" metaphor, where the individual is forced to live. On the other hand, his expectations for the role of workers motivated by "idealism" who should mainly function politically is also studied.

The present paper focuses on Weber's consciousness of the latter. The author deals with Weber's study of labor in a textile factory, "On the Psychophysics of Industrial Work (1908/9)" and so forth. Little attention in previous studies of Weber's educational thought has been devoted to these texts which seem to be mainly in the field of occupational psychology. On the methodology of value-relevance ("Wertbeziehung") however there are his observations and notions concerning textile laborers' practice ("Übung"). Therefore this paper aims to consider the question: could Weber trace any idealistic type of human being, especially — as Wolfgang Mommsen pointed out (1974) — in the *autonomization* of each personality? The

laborer was under the strict human conditions of "mechanization" — quality-automatization, -standardization and -fragmentization, — in the industrial factory. So the task of laborer education was difficult. If it were to a certain extent possible, how could it be accomplished especially from the viewpoint of learning? The results are as follows:

1) On the ground of discrimination between desire — from primary to aesthetic — and functional utility in the theory on market, Weber asked what kinds of attention laborers paid toward the value-realms of *extra-labor*.

2) In factorial labor having regard to not only physical but also intellectual activities, Weber made much of calculative deliberation (what Weber calls "Erwägung"), which was indispensable for ascetic autonomous Protestant conduct.

3) Introducing the new concept of a kind of division of labor ("Leistungsspezifizierung") with which it is possible for even factorial laborers to touch end-products, Weber searched for the possibility of goods-oriented activities of laborers, akin to craftsmanship in the medieval age.

Weber's concepts of training can be characterized by educational regard to "pragmatic" efforts for the autonomous self. Certainly his view of learning was not optimistic. At this point it was like Kerschensteiner's theory of Arbeiterziehung. However, Weber's concepts were presented from *inside* actual and severe situations. Even if laborers existed inside the iron cage-like factory, according to Weber, it was not impossible for them to attain "idealistic" thought.

Key words: practice / division of labor / autonomization / mechanization / pragmatic / Erwägung